

# 経済成長続くスリランカ 力強さともろさ共存

1983年から2009年まで内戦が続いたスリランカは現在、戦後復興に沸いている。実質経済成長率は過去5年の平均で年率6・4%、内戦終結に伴う社会の安定と国内消費の拡大が力強い成長の原動力である。しかし、08年秋のリーマン・ショックによる資本流出を受けて、09年には26億ドルの資金支援とともに国際通貨基金（IMF）の管理下に入るといってもろさも抱えている。12年7月にはIMFプログラムを完了したが、一層の安定成長には電力改革が必須だ。

## 再開発進むコロナボ周辺

スリランカの戦後復興は多岐にわたる。一般道路や商業港など、老朽化が進んだり壊れたりしたインフラの整備に始まり、軍の規模縮小、政府系企業の経営効率化、税制簡素化や徴税能力向上による歳入基盤の強化など懸案は山積している。しかし、目につく変化はやはり市街地の整備である。コロナボとその周辺では内戦の痕跡を抹消するかのような急激な再開発が進んでいる。

復興華やかなスリランカ経済だが、ソブリンリスク（国債の信用不安）からみたこの国の評価は他のアジア諸国に比べてそれほど高くはない。例えば、政府の借金である公的債務残高は国内総生産（GDP）比で約80%もある。企業でいえば、有利子負債がバランスシートを重くしているのと同じで、スリランカ政府の場合、歳入に占める年間の利払いは実に約40%にも達する。

モノやサービス、投資の取引状況を示す経常収支も過去5年

の平均でGDP比約5・5%の赤字を計上している。ただし、外貨準備高が輸入のおよそ3カ月分にあたる約70億ドルあることから「ただちに債務不履行に陥る状況にはないだろう」との判断に至る。

こうした点を踏まえた現地調査の結果、①公的債務残高を含む各種経済指標は改善傾向を示し、データの信頼性もある②公的債務残高の見通しは今後も改善が持続することがある程度の整合性をもって予測できた③政府高官・関係者も改善計画を進

める意志を持っている―ことなどが確認できた。

現地調査のかたわらで、中国の存在感が以前にも増してはつきりしてきた印象を受けた。最近どの国を訪れてもよく話題になるが、中国の新興国進出といえど不動産開発や港湾開発などが多い。スリランカも例に漏れず「この辺の高速道路は中国企业が建設している」と、空港近くで建設中の高架道路を指差してドライバーが教えてくれた。

## エネルギー改革待ったなし

今後3～5年のスリランカ経済を占う上で、エネルギーの自給率向上が非常に重要になるとみている。特に電力部門が問題で、重油を用いるディーゼル発電など火力への依存が燃料輸入の増加につながっている点が懸念される。燃料輸入は足元の経常赤字を拡大させており、復興に伴い急増する電力需要を輸入重油で賄い続けるのは不可能



平日は通勤客で大渋滞となる（2013年8月、筆者撮影）  
 フォート・ブーのバスを撮った人々  
 駅前通り。平日は通勤客で大渋滞となる（2013年8月、筆者撮影）

だ。

高コストな電力供給は、直接投資の阻害要因にもなる。現地では、対岸にあるインドのタミルナド州などの生産拠点を部分的にスリランカにシフトする話が開かれるほか、「チャイナ・プラス・ワン」の候補地にとの声もあるようだ。しかし電力価格が上昇すれば、こういった「風」をつかまえようとする投資誘致計画にもマイナスになる。スリランカの場合、植民地時代の名残から、産業構造は紅

茶や繊維製品などの農業・軽工業に過度に依存してきた。直接投資の誘致や技術移転を通じた工業部門の振興がなければ、自動車、一般機械、建設資材など成長に必要な輸入がいつまでも続き、経常赤字問題は解決の糸口すら見いだせなくなるだろう。

スリランカの今後の経済成長は、エネルギー産業が鍵を握る。確かにIMFの管理下で変動相場制に移行し、対外的なショックを一時的に吸収できるようになったことは事実だろう。しかし中・長期的には、エネルギー問題や産業高度化などの国内要因を解決しない限り、成長は頭打ちとなろう。また経常赤字を放置すれば、ルピー安の基調が強まる可能性がある。ルピー安は輸入燃料の仕入れ価格の上昇を通じて電力価格などへ転嫁され、インフレや利上げと民間投資の減退

をもたらすかもしれない。加えてルピー安は対外公的債務の実質負担増を招き、政府の財務体質はさらに脆弱になるだろう。こうした連鎖的なリスクについて政府関係者と議論したところ、セイロン電力庁やセイロン石油公社など、エネルギー関連企業を含めた国営企業改革を進めていくと彼らは強調した。

### 隠れた資源

ば、このような生活環境は、直接投資や駐在員の派遣を考える日本企業にとって重要な判断材料になるだろう。これはスリランカにとって貴重な資源である。

最後に、スリランカの潜在的な資源について紹介しておきたい。一つは日本人が適応しやすい生活環境だ。現地調査に同行した国際協力銀行ニューデリー事務所駐在員は「スリランカは過ごしやすい」と話していた。町や建物は清潔で、人々は温和で真面目、何よりタイやミャンマーと同じ上座部仏教に安堵を覚えるとのことだった。また、コロンボの日本人駐在員宅を訪問すると、現地の食材を使った本格的な日本食が出てきて驚いた。仮にこれが一般的だとすれ

もう一つは豊富な観光資源である。ターミナルであるコロンボ・フォート駅から電車で3時間余りで、宗教都市のキャンデイに行くことができる。小さな湖を中心とした山間部の町で、紅茶の産地としても有名だ。ここには紀元前3世紀に持ち帰られたというブツダの歯が祭られている寺があるなど、日本では京都のような古都でもある。さらに、コロンボはモルディブの首都マレから飛行機で約1時間間の距離だ。1週間あればモルディブのビーチを楽しんだ後にスリランカの風光明媚な山間部や寺院を訪れることも可能なのである。

（国際協力銀行

外国審査部調査役

春日 剛